

同志社大学
2012年度 卒業論文

論題：被服と自己呈示

社会学部社会学科
学籍番号：19091042
氏名：松山朝恵
指導教員：立木茂雄
(総字数：23324)

要旨

論題：被服と自己呈示

学籍番号：19091042

氏名：松山朝恵

我々は何気ない日常生活において様々な年齢、学校、職業の人々と触れ合って生きている。初対面の人と会うとき、意識的あるいは無意識的に相手を判断する際に、外見からまずその人を判断しようとするのではないだろうか。

そこで本稿は、外見を表す代表のものとして、〈被服〉を手がかりとし、友人 A を分析する。彼女がどのような状況において、誰と過ごし、どのような色の被服を選択し、どのようなことを考え、自己を呈示していたか。我々は自己が求められている印象と作るために自分が所属する社会集団の影響を受けて〈自己呈示〉をしているのではないかと考えた。

分析を行うにあたって、友人 A の 10 歳(小 4)から現在 23 歳(大 4)の写真データを使用し、さらにその時々の背景をしるためにインタビューをした。各年齢において出会う様々な人々の影響を受け、触れ合う日常生活において、彼女の服装を振り返り、どのように自己呈示していたかということを E.Goffman の理論も交えて分析していく。

キーワード：自己呈示、パフォーマンス、面目、setting

目次

はじめに	1
1 自己とは	1
2 先行研究	2
2.1 パフォーマンス	
2.2 面目	
3 印象管理・自己呈示	5
3.1 印象管理・自己呈示とは	
3.2 印象管理を行う理由	
4 分析方法	6
4.1 友人 A に対するインタビュー	
5 結果と分析、考察	9
5.1 周辺の人物、重要な他者	
5.2 インタビューと着装状況からの分析	
5.3 被服の色の移り変わり	
5.4 服装の移り変わりの分析	
おわりに	27

参考文献

はじめに

我々はなぜ服を着るのか。当たり前のように着て、大学に行ったり、買い物に行ったりしている。服を着る理由として、身体を守る、寒さ、暑さを防ぐというように温度調節などの生理的機能を果たすためだと考えられる。

しかし果たしてそれだけであろうか。我々は、何気ない日常生活において、様々な年齢、学校、職業の人々と触れ合っている。その日常生活で他者と触れ合っている際に、いつの間にか相手の目に映る自分の姿が気になり、そしてよい印象をもたれたいと思うことがある。そのために、私たちは、例えば大学に通うために、被服を購入、選択し、〈他者に見られる〉ということ意識して何気なく〈よい印象〉を演出していると考えた。

Kleinke(1975)が、人を判断するときには表面だけを見ていたのではダメかもしれないが、初対面の場合、私たちは相手についての情報をほとんど持っていないので、相手を理解しようとするならば、まず表面的な特徴を観察することによって相手を判断するしか手がかりはないということを述べている(高木ほか 1996)。つまり、外見は人の第一印象を作るうえでたいへん重要な役割を果たすことになるということだ。

よって初対面の人と会うとき、まず目に入るのは相手の容貌や衣服であると思われる。事前に相手のことをよく知っていなければ、ふつうはこれらの外見をもとにして相手を理解することになる。確かに私たちは初対面の人情報は全くもっていないので、相手を判断する役割として外見からまずその人を判断しようとするのではないだろうか。

それと同時に逆に、他者によって〈自己〉が形成される。私たちは、それぞれのさまざまな服を着ることで自分を他者に可愛いと思われたい、真面目に思われたいというように、他者と関わることで〈自己〉を形成し、服装に表すということを何気なくやっているのではないだろうか。日常生活において、様々な人と出会う中、〈自己〉をどのように形成しているか。そこで外見を表す代表のものとして、〈被服〉を手がかりとし、〈服飾と他者との関わり、服装による印象管理〉をテーマに論じていく

この論文においては筆者の友人 A の 10 歳(小学校 4 年生)から現在 23 歳(大学 4 年生)の時の写真データ、インタビューを年代別に分析し、彼女が過去どんな服装をしていたということを振り返り、どのように自己呈示し、自己が変化していたかということを分析していく。

1 自己とは

自己と被服との関係を理解する前に、〈自己〉とは何であるかをまず考えたい。自己について James(1890)は、自己を〈知る自己〉と〈知られる自己〉に分けたと述べている。この〈知る自己〉というのは主体 (I) としての自己、〈知られる自己〉というのは客体 (me) としての自己のことであり、またジェームスは知られる自己について次の 3 つの構成要素を見いだしている。まず 1 つ目は、自分の生命や身体、衣服、家族、家庭、家屋、財産な

どの身体的自己である。2 つ目は他者との関係をもとに形成される自己、社会的自己である。それは、地位や職業、名声、評判など、自分の社会的存在としての側面、また、ほかに自分の所属集団、国家あるいは所有物などが挙げられる。3 つ目は自分の欲求や感情、意志、能力、性格など、個人の内的な、また主観的なものである、精神的自己がある。これらの3つの要素が個人の中で密接に組み合わされて自己ができていると考えられる（高木ほか 1996）。

また神山進（1998）は〈自己〉に関して、被服が自己を確かめ、強め、変える対象としての自己には、ボディ・イメージ（身体像）と、それを一部に含むセルフ・イメージ（自己像）があると述べている。また、被服とボディ・イメージやセルフ・イメージの間の関係については、被服がこれらのイメージを肯定的ないし否定的に構築するという側面と、これらのイメージが社会的に操作されるという側面が重要であると指摘している。

2 先行研究

まず本章は、Goffman の著書の *The Presentation of Self in Everyday Life* (1959) と『儀礼としての相互行為』（1967=2002）を参考にして Goffman が論じた自己呈示に関する理論について明らかにしていく。

2.1 パフォーマンス

Goffman は、日常生活において人々が演じる行動を〈パフォーマンス〉と呼ぶ。これは、ある状況にいる参加者が、どのような仕方であれ、他の参加者に影響を及ぼすのに役立つようなすべての行為を指す。これは単なる行為・行動といった動作だけの意味には止まらず、その場に居合わせる人びとに何らかの形で影響を与えるすべての行為、日常生活において人々が演じている行動のことを指している。パフォーマンスをする人を〈パフォーマー〉と言い、そのパフォーマンス、自己に関する情報の受け手となる人たちのことを〈オーディエンス〉と呼んだ。

さらに人間の行為が演じられる背景や小道具となっている家具・装飾品・物理的配置・その他の背景になる品々を含めて〈舞台装置（setting）〉と呼ぶ。さらに演出する時に協力関係をもつ集団を〈パフォーマンス・チーム〉として捉えている。

私たちは日常生活において、何らかの役割を演じ、理想の自己や偽りの自己を呈示している。その意味で、相互行為において人は少なからずパフォーマーである。他者に対して自分の都合のよい自己を演じる、パフォーマンスを行っていると思われる。そして、相互行為の要素としての自己と他者をパフォーマーとオーディエンスという構図が考えられる（Goffman 1959）。

被服を通して同様の構図を考えることができるであろう。日常生活においてパフォーマーである私たち個人は、オーディエンスである身の回りの人々に対して何らかの役割を演じ、自己呈示している。

2.2 面目

では以下『儀礼としての相互行為』（Goffman 1967=2002）を参考にして Goffman のいう〈面目〉という概念について述べていく。

人はそれぞれ、他者との相互行為では自分がどういう人間かという自分らしさを示さなければならない。それをゴフマンは〈方針〉(line) と言う。これは、行為者が相手や相互作用の場面、とりわけ自分自身をどのように見ているかを伝達するために用いる言語的・非言語的行動のことであり、人は自分のいる状況についての意見を表明し、またその場にいる人たちに対する評価、とくに自分自身に対する評価のことである (Goffman 1967=2002)。

この〈方針〉をもとに作られた他者に知られる自分をめぐるイメージであり、特定の場面で人が主張する肯定的な価値のことを〈面目〉(face) と言う。つまり、他者によって作られた、〈望ましい自己イメージ〉のことだと考えられる。

安藤(1994)によると、ゴフマンは、俳優が観客に対してある立場ないし筋書きを演じるのと同じように、日常生活における人々の相互作用を捉えようとした。もちろん、実生活と演劇の間に相違点はある。演劇では、そこで起きている出来事をリアルであるように見せるのだが、実生活は文字通りリアルなものである。また、実生活では、多くの場合〈俳優=自己呈示者〉と〈オーディエンス=自己呈示の対象〉だけであるが、演劇では、複数の俳優が相互に行為者とオーディエンスを交代し、その他に〈本当のオーディエンス〉としての観客がいる。しかし、実生活と演劇の間の違いがこれくらいしかないということは、逆に、人間の生活を演劇にたとえることが適切であると述べている。

そこで私はこの論文において、Goffman(1967=2002) のいう〈方針〉を〈自分に対するイメージを作り上げる被服〉だと考えた。〈面目〉においては、私が〈方針〉によって、自分のいる状況、立ち位置や、私が自分自身をどのように思っているのか、また他人が私自身についてどのように思っているのか想定し、それにそって、〈被服を着る〉ことによって自分自身を作り上げることと考えた。つまり、私自身が、自分を評価すること、他者が私を評価することによって自分のイメージを作り、それを守っているのである。その自己のイメージを守っている状況のことを〈面目を保つ〉ということであり、被服を着るということに密接な関係があると考えた。

(1) 面目を保つ

ある人が面目を保っていると言えるのは、その人がとっている方針がその人の心象を無理なく表現し、しかもその心象が、内部的に統一されており、その場にいる人たちが伝えてよこす判断や証拠によって支えられており、しかも、その場にある人間以外のいろいろな要素を通じて伝えられる証拠によって検証される、そんな状況である。その時のその面目は、その人の身体に固有にあるものではなく、出会いにおけるいろいろな出来事の流れのなかで出てくるものであり、それらの出来事が解読されて初めて明らかになるものである。面目を保つとは、その人が、その人自身のイメージを表している〈その人らしい〉と周りの人たちが思うような表現を守り行動することである。自己のイメージに感情面で執着しているから、誇りや名誉があるから、自分なりにあると思っている地位を利用し、その場にいる人を動かす力が欲しいから様々な他者との相互行為では〈面目〉を継続的に保つ必要性がある。時には、面目を保つために自分の考えていることとは異なった行動をと

ることもあると述べられている (Goffman 1959)。

このことについては、安藤(1994)によると、日常の対人関係の中で、他者が私たちに対する印象を形成するときに使う自分の外見や言動といった手がかりを調整することによって、他者が私たちに対して抱く印象に影響を与えようとしている。実際、ふだんの生活わたしたちはこの種の行動に多いに関わっていると述べている。たとえば、面接の場面では、仕事をこなす能力があるばかりでなく、職場で円満な人間関係を維持できる人間であるように〈見せる〉ことも必要である。実際にはそのような能力がないのに、あたかもあるかのように〈背伸びをして見せる〉という場合のように、多少とも偽りの要素が含まれる見せ方がないわけではない。しかし、日常生活の多くの場面を考えてみると、相手に見てもらいたいと思う自己の姿をイメージして、その姿通りに見てもらえるように自らの言動を組み立てたり、外見を整えたりすることの方が多いうように思われる。自己を偽って〈見せる〉というよりも、さまざまな自己の側面のうち、特定の側面を選んで〈見せ〉、他の部分を〈見せない〉ということを行っている。

また中島義明、神山進(1996)は、印象管理の自分を偽って見せるということはネガティブなものとして考えられがちであり、人間の社会的行動を規定しているのは、あくまでもそれぞれの個人が認知している社会的現実であることを考えれば、適切な印象をつくり出すことが社会的動物としての人間にとって欠かせないものということができる。このことを含めてわれわれは衣服を社会的な道具として積極的に活用する術を身に着つける必要があると指摘している。

(2) 面目を失う

しかし、時には〈面目〉が他者によって〈つぶされる〉こともあるし、〈面目〉を〈失う〉こともある。ある人が面目をつぶすと言える場合は、その人がとっている〈方針〉とどうあっても衝突してしまうような情報、その人の社会的価値をめぐるそのような情報が前面に出てくる場合である。その人が面目を失うと言える場合は、その場にいる人たちが期待しているような方針を用意できぬまま、その人たちと接触する場にその人が入ってゆくときである。これはつまり、〈他者によって作られた自己イメージ〉を演出することができなかつたということだと思われる。また、人は面目をつぶれることを恐れると示されている。Goffmanはその理由の一つは、その面目を潰れるのを他人たちが見た結果、その人のいろいろな感情に対する配慮を今後払う必要がないと他人たちが考えるかもしれないからと述べている。つまり、他者が自分とあまり関わらないようになり、自分に対して今後他者の意識が薄れていくことを恐れているのではないだろうか。面目は決して自分1人で保っていられているものではなく、他者も協力してその人の面目を保とうとしてくれるものだと指摘している。例えば、私たちは誰かと会話が始めれば相手の面目を保つ努力をしている。これが〈儀礼〉であり、ここにこそ〈秩序〉がある。このようにして、相互行為において人は自分の面目を維持すると同時に相手の面目を保つといった暗黙のルールがある (Goffman 1967=2002)。

〈被服を着る〉という例で考えてみると、他者が自分に対してもっているイメージの服装を着ないことであつたり、着こなすことができなくて、他者が期待した自分のイメージを作りあげることができなかつた場合のことだと考えた。つまり他者が望む自分を作り上

げることができない場合である。

3 印象管理・自己呈示

3.1 印象管理・自己呈示とは

まず自分自身の写真データを分析する前に、印象管理、自己呈示とは何か、定義を明らかにする。日常生活において、我々は他者に対して様々な印象を抱く。この印象は、他者が発する言葉のような言語的特徴からだけではなく、しぐさ、表情、身体、化粧、髪型、服装といった他者の非言語的特徴からも大きな影響を受けている。他者から入手した言語的、非言語的情報を手がかりにして、相手についての印象を形成していくこのような過程は、印象形成過程と呼ばれる。中島・神山(1996)によると、特に衣服には個人の性格、態度、感情、意図などが反映されている信念を人々はおもっており、重要な手がかりとして活用されると述べている。

個人に備わっている外見が、他者により推測される性格の印象を強く規定しているという事実は、自己のふるまい方や外見を変化させることで、他者に対して与える性格の印象を意図的に変容させることが可能だということを示している。他方、日常生活において、我々は人によって利用される言語的、非言語的手がかりをうまく利用し、調整して、他者に特定の印象（特に、好ましい印象）を与えようと試みる、印象形成過程に対して、特定の印象を他者に与えようと意図的に試みるこのような過程は、自己呈示あるいは印象管理と呼ばれる(鈴木・神山 2003)。

私たちは、自己概念ないしは、自己評価を維持あるいは高めようとする欲求をもっている。もしある人が、自分は有能であるという自己概念をもっているならば、その自己概念を維持するために、有能であるという社会的アイデンティティを確立しようとするだろう。この刻的のために、その人は話しをする相手の心の中に自分が有能な人物であるという印象を作り上げようとする(高木ほか 1996)。例えば、二宮・子安(2011)は、就職を望んでいる企業の面接を受けている学生が、〈日常的な英会話ならできます〉と面接官に話す場合、この学生の発言は、自分の能力について面接官により印象をもってもらうことを目標にして行われたものと考えられると述べている。

このように、自分にとって都合のよい印象を形成させるために、有能な自己を相手にアピールする行動をとることになる。この印象管理を行う者は Goffman (1959)における〈パフォーマンス〉と考えることができる。

我々は日常的な行動の中で、適切な社会的関係を形づくるために、意識的または無意識的に、自己の印象を管理するための努力を行っている。つまり人々が他者の心の中に、自分にとって都合のよい印象を作り出そうし、他者が自分に対していただく印象を管理するはたらきかけをすることである(中島・神山 1996)。

3.2 印象管理を行う理由

ここで、私たちが印象管理もしくは自己呈示を行う理由について考えてみる。私たちがある人と接し、話をする時には、自分なりに作りあげた相手の印象に基づいて対応するこ

とが多い。もし、私が相手について常々清潔な服装をしているさわやかな人物だという印象を持っているならば、私はその人に対してさわやかな人だという自分なりの印象に沿って対応する。もし私が相手を、いつもだらしない服装をするルーズな人だという印象を持っているならば、この印象に沿って行動する。つまり自分のいだいている印象が相手へのはたらきかけを規定するということであり、逆にいえば、相手が自分についてどのような印象を持っているかによって、相手の自分に対する行動はある程度決まってくる。自分にとって都合のよい印象を相手に与えることは、結局は自分自身への肯定的な結果を導くことになる」と述べている。よって相手の心の中によい印象を作ってもらおうことが、その人との人間関係を発展させるうえで、たいへん重要になってくるのである。この印象管理において、服装が貴重な意味をもつことがわかる（高木ほか 1996）。

よってほとんどの場合私たちは意識的に、観察される側、つまり着用者は相手によい印象を与えるように服飾を操作していることになる。これが印象管理であり、良い印象を与えることができるように工夫していると述べている（藤原ほか 2005）。私は、この印象管理(自己呈示)するということは Goffman(1959)の言う〈面目を保つ〉という概念に当てはまると考えた。Goffman(1959)は、私たちは自分の所属する集団、あるいは自分の社会的地位の伝統によって意識的に、自分が得たいと考える特定の反応を呼び起こす可能性の高い印象を与えるためのみ、自分自身を表現するとも述べている。

ここで我々は、意識的にも無意識的にも、自己が求められている印象と作るために、自分が所属する社会集団の影響を受けて〈自己呈示〉をしているのではないかと考えた。我々は、その時々社会集団の影響を受け、その相互作用を通して、Goffman(1967=2002)のいう〈方針〉、つまり自分に対するイメージを作り上げる〈被服〉を選択し、自己の面目を保っているのではないだろうか。

先ほども述べたように、Goffman(1959)によると、その時のその面目は、その人の身体に固有にあるものではなく、出会いにおけるいろいろな出来事の流れのなかで出てくるものであり、それらの出来事が解読されて初めて明らかになるものである。そこで、友人 A の過去の写真データや彼女に対するインタビューを通して、彼女の各年齢における集団(オーディエンス)との関わり、その当時の背景(setting)心情などを振り返る。どのように彼女(パフォーマー)が自己呈示し、面目を保ちながら自己が変化していったかということ次章で検証する。

4 分析方法

本論文の研究対象として、筆者の友人 A を取り上げる。彼女の属性について述べる。彼女は、年齢 23 歳(現在)の大学生である。奈良県にあるとある田舎の市に生まれ、引っ越しをするわけでもなく、長年その土地に住み続けている。家族構成は、父親、母親、兄の 4 人で構成される核家族である。学歴については、小学校、中学校を地元で過ごしたあと、県立の高校に進学し、1 年間の予備校生活を経て、京都の大学に入学した。この友人 A が服装に対して意識し始めた 10 歳(小 4)から 23 歳(大 4)までの写真データを収集し、その時にどのような被服を選択し、自己を呈示していたかということ客観的に分析する。

まず、友人 A の過去から現在までの被服や当時の心情などといった背景を知るためにインタビューを行った。

4.1 友人 A に対するインタビュー

(1) 小学時代

10 歳か、この頃は遠足や運動会とか学校行事でよく写真を撮ったわ。10 歳の遠足の時にカメラを持っていくのを許可されたから、学校の友人と遠足の思い出を写真でたくさん撮ったの覚えているな。あと、家族と旅行にも行っていたかな。

あ、あと学習塾に通い始めたから「私服」として何を着装しようかということ意識し始めたわ。お母さんがよく自身の服を通信販売で買うことがあったから、そのカタログを一緒に見たりすることが楽しかったな。自分が可愛いと思う服装と母が可愛いと思った服装が一致したときで、あ、その商品が高価な洋服じゃなくてね、初めて買ってもらえたな。でもね、これは中学校の頃もやけど、下は G パンばかりなんよね。なんかデニムが友達の中では流行って。

小 5 は、あまり家族と出かけなくなったかな、その代わりに、時々休日に電車に乗って友達と隣町まで遊びに行くようになったな。プリクラ（プリントクラブ）を撮る時、「良い写りで写る」ということにこだわり始めたかな。これまで、学校以外で休日に会う機会がなかったけど、この時期くらいからかな、友達と隣町まで出かけたりし始めたのは…写真撮るとなると、自分の服装を良くしたい、みんなに「可愛い服だね」と言われたい、というように思うようになったのかも。見られてるってのを意識してたな。

12 歳は、小学生最後の年だからさ、修学旅行、卒業式というような行事ごとで、同級生とか、家族とか、担任の先生と一緒に写っている写真が多いな。また、ピアノを小学校卒業まで習ってたからさ、発表会で撮った写真もあるわ。あと、小学校のソフトボールチームに入っていたので、試合の時にユニホーム姿で撮った写真（習い事）もあるな。この頃も学校の友人とか塾の友人と電車に乗って遊びに行ってたな。

(2) 中学時代

あと…中学生になってティーン向けのファッション誌を読むようになったわ。雑誌に載っているモデルさんが着ている当時流行したな、キッズブランドの服、マネして買った。キャラクターモノとか大きい英語のロゴが入った服とか。中学生なってから塾に行く頻度が高くなったから、写真は撮ってないけど、私服を着る機会が増えてん。とにかく塾の友達が着ていたブランドが欲しいなと思った。なんかデザインが好みだからという理由だけでなく、塾の友達とか雑誌のモデルさんが着ているから…、とか…学校の友達と遊びに行くときに、塾の友達に影響を受けた服を見せるため…とかで服をほしいと思っていたわ。なんというか周りに流されやすいかも。小学校の頃はみんなで歌手のマネしてたし。小 4 くらいからずっと。ヒョウ柄とか迷彩柄とか。

中学校に入学してからは、小学校の時より遊んでたなあ。遊びの行動範囲が広がったしな。あと、部活を始めたから、同級生とか先輩に関わる機会が増えたわ。あ、あと中学入

ってすぐお母さんと久しぶりに旅行に行った。

中2は、クラス替えが行われたけど、仲のいい子は変わらなかったな。学校も塾も。服の話はよくした、相変わらず。

中3は受験やから、遊びはさすがに減ったわ。周りの子、真面目やったし。運動会…修学旅行とか高校受験の合格発表の日とか卒業パーティーとか今までない特別なイベントで写真撮ったの覚えてる。

(3)高校時代

高校の時は、これまでよりもっとファッション誌を読んで、服装研究してたな。お洒落でありたい、目立ちたいってのは、中学校時代と変わらんかった。

高1はね、中2の時みたいによく遊びに行ったわ。休みの日に電車で隣町まで中学校の時の友人と遊んだり…、学校の放課後に制服を着たまま遊んだ。あと、服とかアクセサリを大阪とか県外まで買いに行くようになった。

一緒に買い物に行くお洒落な友達とか、洋服ショップの店員さん、街中で歩いている同年代の女子、ファッション誌に載っている憧れのモデルさんとかの参考にして服を決めてたな。

高2は制服を相変わらずよく着て遊んでた。この頃はな、高1もそうやけど、めっちゃ大好きなアイドルグループのコンサートに行くことを趣味やった。コンサートで着ていく服はいかに他のファンより可愛くて、目立てるかとかばかり考えてた時代やな。めっちゃピンク大好きな時代やわ。私服と言えばピンクみたいな。姫系とか自分で言ってた。ほんま女の子らしさを出したかった。

18歳はまた受験。遊びは中3の頃みたいに減るな。アイドルのコンサートに行くことも中止したし。勉強に専念していたから自分の服、そんなに関心がなくなったな。高校は文系コースの中でだけのクラス替えだったからさ、友人も変わらなかった。あ、あと、学校にも塾にもずーっと制服を着て過ごしてたから、どこ行く時も。だから特に服新しく買うことはなかったし、お洒落とか意識することもなかったわ。みんなと同じ制服着て過ごす好きやったし…なんか青春。なんか友達っていいな、というような。

(4)予備校時代

この頃の写真データはめっちゃ少ないな。予備校生だったし「遊び」を控えているけど、「遊び」の時の写真しかないな。真面目にみんなで勉強してた。予備校の友達とカラオケに行った時に写真撮ったのは残ってるな。あと、受験票に貼り付けるために証明写真撮ったくらい。服装はこだわらないな。でもさすがに寝間着のまま予備校に行くのはおかしいから高校の時に買った服とか着ていたような…でも派手ではなく、自分にとって平凡に見える服。なんかみんなに受験生らしく見られるように…平凡にね。

(5)大学時代

まず、入学式当日に母親と写真をとったわ。なんか入学したばかりの頃は。同じ大学の友達というより、同じ趣味の学校以外の友達と旅行に行ったり、遊びにいったりしてたな。友達はできたけど、大学でほとんど毎日会ってたし…大学以外で遊ぶことはほとんどなかったかも。学校以外の友達とよく服は買いに行ってたのかも。自分に似合うような服、よくアドバイスしてくれてたし。2 回生の時もそうだった。趣味が合う子とよく遊びに行った。

なんか今思い出したら笑えるけど、大学の入学当初、「大学デビュー」というものしようとしてたな。まず…髪の毛を染めたり…服をたくさん買いにいったり…。高校の時に買ったピンクの洋服もあってんだけど、自分のイメージする大学生は、もっと「大人らしいイメージ」って思って！毎日自分はどのような服装をすればいいのかとかものすごい悩んだな。あ、その買った服とか似合うわけないから着てないけど。まあ、とりあえず、ブーツとかレギンスとかタイツにショーパン(ショートパンツ)ってスタイルが自分の王道になってたかな？大学生の時にできた友達は一貫してカジュアル…カジュアル系の子たちに囲まれてるな。

でも3 回生からはなんか大学にも慣れて楽しい！って思い始めた時かも。何気ない日常生活を写真に撮るのが好きになった頃。今でもだけど、カメラいつも大学に持って行ってよく休み時間とか放課後とか撮ってたな。大学以外にも大学の友達と遊んでいたな。

4 回生は、本当にいろんな人と写真撮ったなあ…まずゼミの友達は本当にたくさん写真撮ったし…他学部の子とも写真撮ったし。あとは…留学生のハロウィンパーティーとか、他にもいろんなパーティー行ったからそこでも写真撮ったな。あ、大学の友人以外にも参加しているよ、そのパーティー。友人関係広がったな。いろんな人との繋がりができた年かな。でも大学の友達と本当によく一緒にいたし、1 番自分らしい服…着ていたかな。色は大学生の時を通して小さい時のころと変わらずピンク大好きでピンクメインで着ているときもあるけど…別にこだわってるわけじゃなくて。フリフリの襟とか女の子っぽいカジュアルな服？そういう系かったら色構わずいろいろ持つてる。どちらかというデザイン重視かな。

5 結果と分析、考察

5.1 周辺的人物、重要な他者

次に、Goffman (1959) のいう〈パフォーマー〉の演目を定める友人 A と一緒に写真に写っている他者を明らかにしていく。彼女自身の日常生活において影響を与えたであろう重要な他者を明示し分析する。

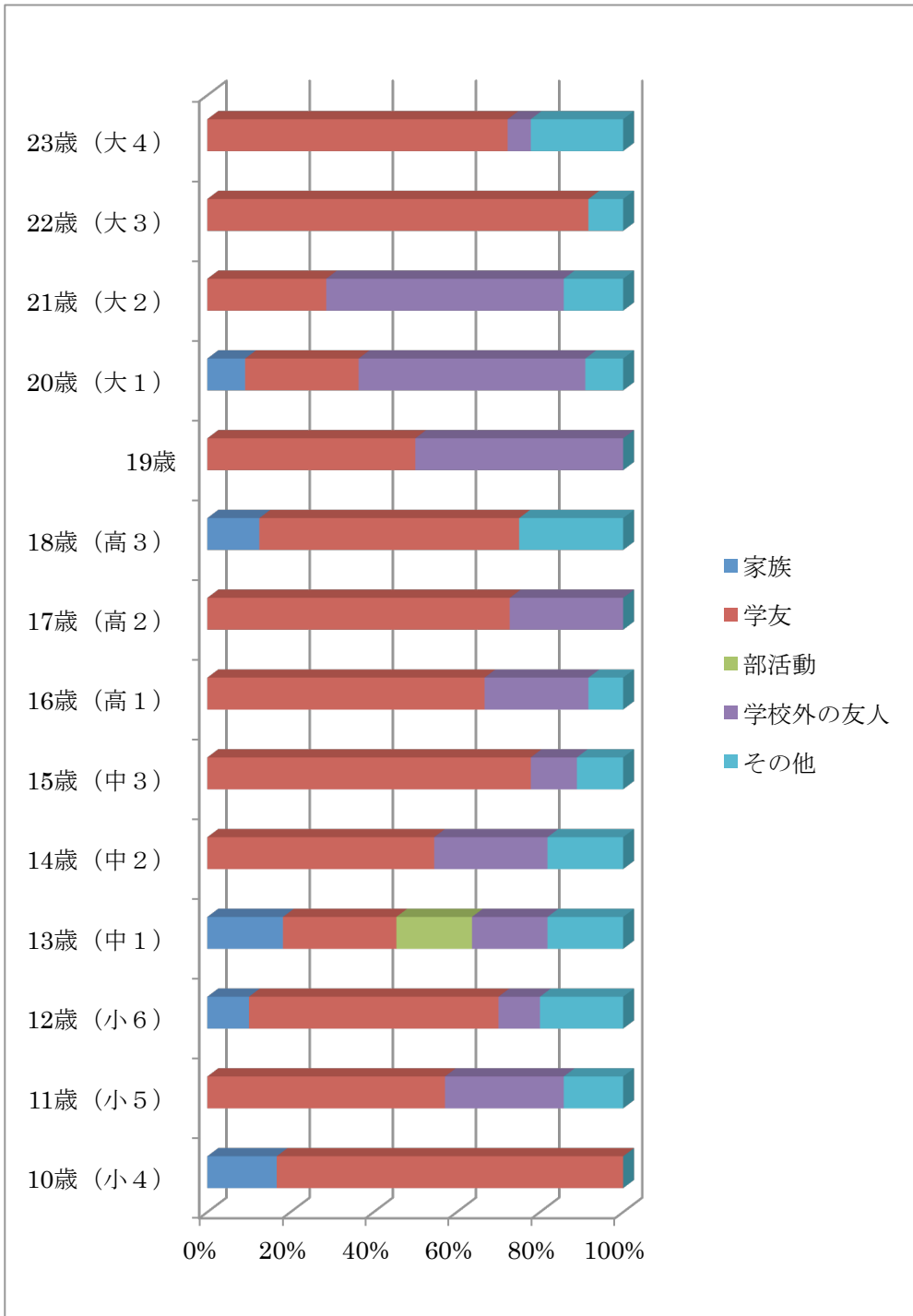


図 5-1-1 周辺の人物と年齢(10歳～23歳)

表 5-1 周囲の人物と属性(10歳～23歳)

年齢 (学年)	周囲の人物の属性(%)				
	家族	友人			その他
		学友	部活	学校外の友人	
10歳 (小4)	1(17)	5(83)	0(0)	0(0)	0(0)
11歳 (小5)	0(0)	4(57)	0(0)	2(29)	1(14)
12歳 (小6)	1(10)	6(60)	0(0)	1(10)	2(20)
13歳 (中1)	2(18)	3(28)	2(18)	2(18)	2(18)
14歳 (中2)	0(0)	6(55)	0(0)	3(27)	2(18)
15歳 (中3)	0(0)	7(78)	0(0)	1(11)	1(11)
16歳 (高1)	0(0)	8(67)	0(0)	3(25)	1(8)
17歳 (高2)	0(0)	8(73)	0(0)	3(27)	0(0)
18歳 (高3)	1(12)	5(63)	0(0)	0(0)	2(25)
19歳	0(0)	1(50)	0(0)	1(50)	0(0)
20歳 (大1)	1(19)	3(27)	0(0)	6(55)	1(19)
21歳 (大2)	0(0)	2(29)	0(0)	4(57)	1(14)
22歳 (大3)	0(0)	11(92)	0(0)	0(0)	1(8)
23歳 (大4)	0(0)	13(72)	0(0)	1(6)	4(22)

※各年齢で1番多く一緒に写っている属性に色をつけている。

写真データからはその当時の友人 A の日常生活において、どのような他者が中心となっていたのが確認できた。この表の大まかな特徴としては、20歳(大1)、21歳(大2)を除

いては、〈学友〉と写っている写真が多いことが読み取れる。また、10歳（小4）22歳（大3）の頃はこれまでに比べて〈学校外の友人〉との写真が非常に少ないという特徴が分かる。

〈家族〉とは年齢が増えていくと、入学式、卒業式という行事事以外では写真を撮ることはないため、周辺の人物として現れる年齢は限られることも分かる。

次に写真データから10歳（小4）から23歳（大4）までの友人Aの写真が撮影された〈状況〉をインタビューの内容を踏まえて分析していく。着装状況の項目としては、主な学校行事（大学におけるゼミ活動も含む）、習い事、入学式・卒業式、遊び、友人との旅行、成人式、部活動、さらに日常生活やさまざまなイベントをその他とし、年齢別に明らかにしていく。

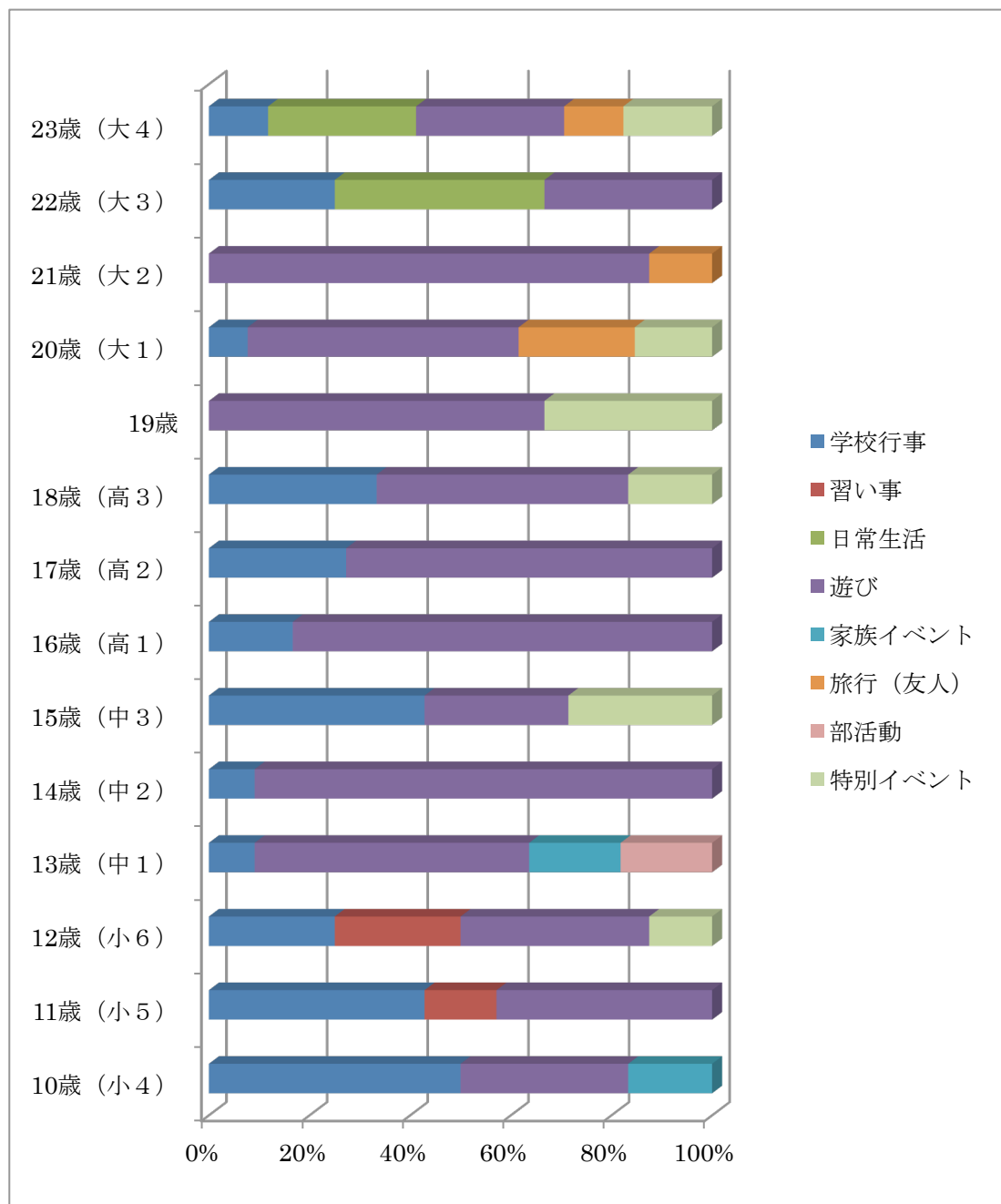


図 5-1-2 年齢と着装状況

5.2 インタビューと着想状況からの分析

(1) 小学時代

まず、10歳（小4）は図5-1-2を見ても分かる通り、学校行事が5割弱を占めていることがわかる。この頃の学校行事とは遠足や運動会（体育祭）など指す。また家族イベントが2割を占め、家族との触れ合いの機会を大切にしていたことがわかる。

11歳（小5）は家族イベントがなくなり、写真データとしても残っていない。その代わりに、時々休日に電車に乗って友人と隣町まで遊びに行くようになったため遊びが増える。

12歳（小6）は学校行事が25%を占める。小学生最後の年だということもあり、修学旅行、卒業式というような行事ごとにおいて、同級生、家族、担任の先生と一緒に写っている写真が多い。また、ピアノの発表会で撮った写真や、小学校のソフトボールチームの試合の時にユニホーム姿で撮った写真といった習い事の写真も多い。11歳の頃と同様に学校の友人や塾の友人と電車に乗って遊びに行くことがあったので遊びの割合は4割である。

(2) 中学時代

中学校に入学してからは、小学生の時以上に遊びが5割以上に増える。もう1つの特徴として、母親と久しぶりに旅行に行くことがあり、久しぶりに家族イベントが含まれる。

14歳（中2）の残っている写真は9割以上が遊びである。クラス替えが行われたが、友人関係は依然として変わらず、今までと同じ友人（学校も塾も含める）と過ごす時間が長かった。インタビューにおいては学校外の友人の影響を強く受けていたことが確認できる。しかし、図5-1-1からもわかるように学友が5割を占めることから学校外の友人以外にも学友も自己の被服を見せる対象となっていることがわかる。

15歳（中3）は、受験生ということもあり、遊びの割合が25%までとかなり減った。体育祭、修学旅行という学校行事が4割、高校受験の合格発表、卒業パーティーなど特別イベントが26%、遊びが24%を占めること、表5-1の学友が78%を占める。

(3) 高校時代

この頃は14歳（中2）の頃と同様に遊びの割合が増える。しかし、18歳（高3）の特徴として、16歳（高1）、17歳（高2）の時より遊びが減り、学校行事が3割弱を占める。図5-1-2からも15歳（中3）の頃と同じように遊びが減少する傾向が伺える。大好きなアイドルのコンサートに行くことも中止したことや大学受験のために勉強に専念して自分の被服についてあまり関心がなくなったためだと思われる。

(4) 大学時代

大学に入学したこと、入学式当日に母親と写真をとったことから家族の割合前年より表5-1から読み取れる。この頃の遊び、新たな項目として友人との旅行に含まれる写真というものはほぼ学校外の友人と撮影したものである。

21歳は遊びが8割以上を占める。この旅行もその学校外の友人、との旅行の時に撮影した写真のことを指す。

22歳の特徴としてまず挙げられるのは、日常生活の割合が4割とかなり増えたことであ

る。この日常生活には大学の授業の休み時間や放課後に友人と写真を撮るということを含める。表 5-1 の学友が 92%と過去最高の割合を示していることから、大学生活に非常に慣れた頃である。

23 歳（大 4）は表 5-1 の周辺の人物と属性の結果学校外の友人、その他の割合が 22 歳（大 3）より増えたことから確認できる。大学 4 回生になり、友人関係も広くなり、これまでに比べ、たくさんの人々と触れ合う機会が増え、学校の友人、学校外の友人、その他などと人間関係もこれまで以上に広がり、自分の所属する社会集団が増えたことが読み取れる。

5.3 被服の色の移り変わり

外見によって表現される自己はどのように移り変わっていくだろうか。具体的に友人 A がどのような外見をしていたのかを理解するために、彼女の 10 歳（小 4）から 23 歳（大 4）までにおける服装の移り変わりを明らかにしていく。まず始めに各年齢において被服に取り入れられる色の変化についてみていく。被服は上下の被服の色や柄、身につけているもの（タイツ、レギンス、カバン、ブーツなど）全てのものを総計している。

表 5-3 被服の色と年齢(10歳～23歳)

年齢 (学年)	色(%)													
	白	黒	グレー	茶	赤	ピンク	ベージュ	橙	黄色	青	紺	水色	緑	紫
10歳 (小4)	3(30)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(10)	0(0)	2(20)	0(0)	2(20)	2(20)	0(0)	0(0)	0(0)
11歳 (小5)	5(36)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(22)	0(0)	0(0)	0(0)	3(21)	3(21)	0(0)	0(0)	0(0)
12歳 (小6)	5(31)	0(0)	0(0)	0(0)	1(6)	2(13)	0(0)	0(0)	0(0)	4(25)	3(19)	1(6)	0(0)	0(0)
13歳 (中1)	5(18)	4(14)	1(3)	0(0)	3(11)	5(18)	0(0)	0(0)	0(0)	5(18)	3(11)	0(0)	2(7)	0(0)
14歳 (中2)	6(21)	5(18)	0(0)	0(0)	4(14)	1(4)	1(4)	0(0)	0(0)	7(25)	2(7)	2(7)	0(0)	0(0)
15歳 (中3)	3(25)	2(17)	0(0)	0(0)	0(0)	1(8)	0(0)	0(0)	0(0)	2(17)	3(25)	1(8)	0(0)	0(0)
16歳 (高1)	5(21)	2(8)	5(21)	1(4)	0(0)	3(13)	0(0)	0(0)	1(4)	6(25)	0(0)	0(0)	0(0)	1(4)
17歳 (高2)	7(31)	1(4)	4(17)	0(0)	2(9)	7(31)	0(0)	0(0)	0(0)	1(4)	0(0)	0(0)	0(0)	1(4)
18歳 (高3)	1(9)	0(0)	6(55)	0(0)	1(9)	2(18)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(9)
19歳	1(20)	1(20)	0(0)	0(0)	0(0)	1(20)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(20)	0(0)	1(20)
20歳 (大1)	8(31)	7(27)	2(7)	0(0)	1(4)	2(8)	1(4)	0(0)	2(8)	0(0)	0(0)	3(11)	0(0)	0(0)
21歳 (大2)	3(16)	2(11)	3(16)	3(16)	0(0)	3(16)	0(0)	0(0)	0(0)	1(5)	1(5)	1(5)	1(5)	1(5)
22歳 (大3)	2(9)	4(17)	4(17)	4(17)	2(8)	2(8)	0(0)	0(0)	0(0)	2(8)	2(8)	0(0)	2(8)	0(0)
23歳 (大4)	5(12)	8(20)	0(0)	5(12)	4(10)	6(15)	1(3)	0(0)	0(0)	1(2)	3(7)	1(2)	4(10)	3(7)

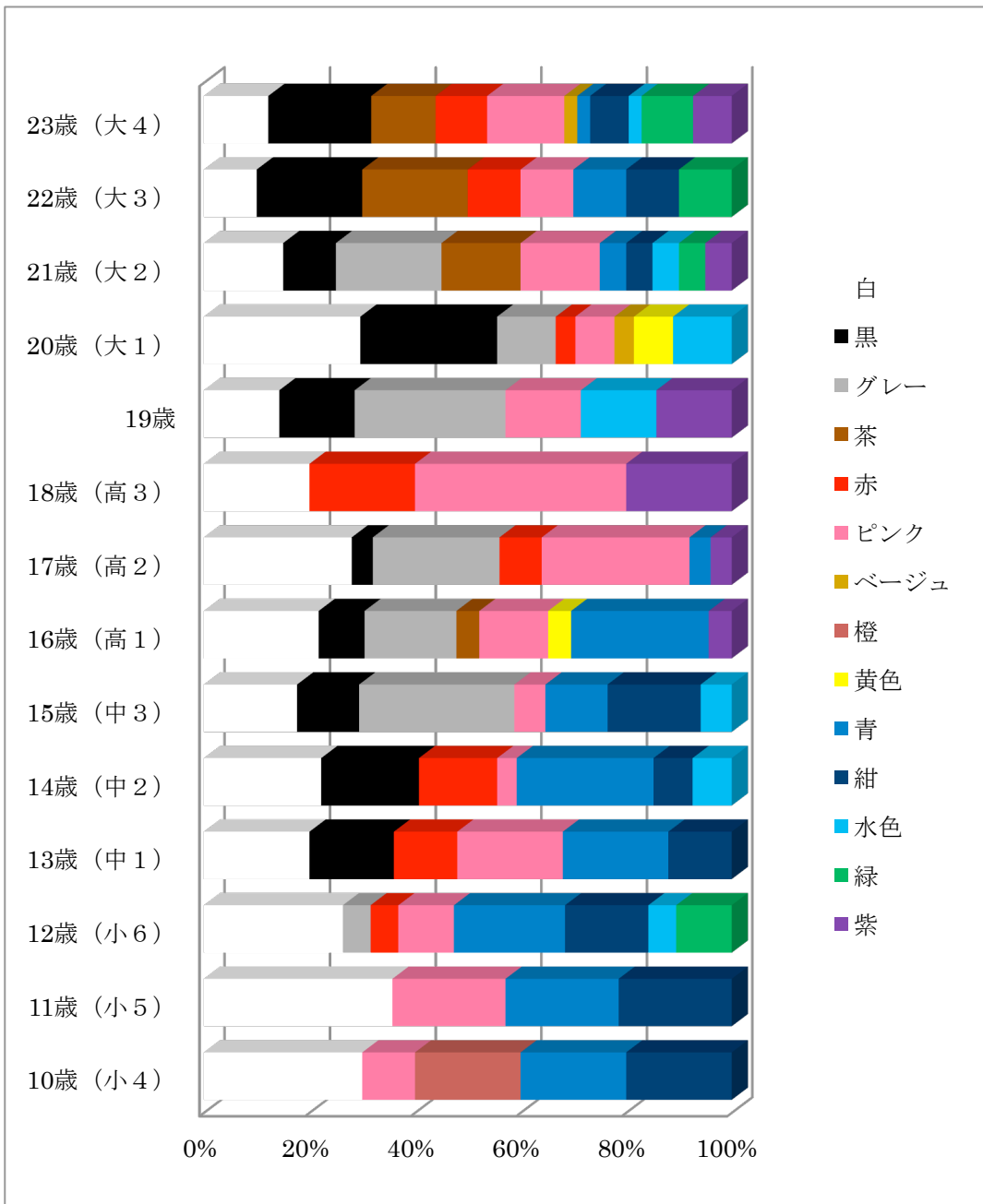


図 5-3 被服の色と年齢(10歳~23歳)

ここで色の変化についてのおおまかな特徴について述べていく。まず白はどの期間においても選択されている。全体の3割を超えているのは、10歳(小4)、11歳(小5)、12歳(小6)、17歳(高2)、20歳(大1)である。小学生の時に比較的に白の割合が高くなっているのは、運動会や修学旅行の時に、体操服、制服で写真を撮ることが多く、それらの色に使われていたためである。また小学生、中学生の時に紺が選択されているのは同じく、中学校の制服であるセーラー服、水色が選択されているのは体操服であるジャージの色であり、それらを着装しているからである。

次に黒は、小学生の時には選択されることはなく、中学生の時から割合として確認でき

る。高校生の時は取り入れることはあまりなかったが、19歳になると、新たにタイツやレギンス、ブーツを身に着けることになったので、その分として黒の割合が増えた。

グレーは、高校の制服のブレザーやスカートの色であり、高校時代に上昇していることが分かる。制服を毎日、私服のようにどこに行く時も着装していた高校生3年生の時は、他の色よりも割合が高くなっている。また小学生、中学生、高校生の時に制服以外としてほとんど着ることがないグレーは大学生、特に21歳（大2）、22歳（大3）においては着装される頻度が増えたことが分かる。

青は、小学生から16歳（高1）の時はロングパンツとしてジーンズを着用する機会が多かったため、少なくとも2割弱の割合を占めていたが、17歳（高2）からは割合が激減する。小学生、中学生は1割から2割占めている。〈私服〉というものを意識し始めたとはいえ、ズボン類の中でもGパン以外を着用することがあまりなく、服装に対するこだわりがあまりなかったことが伺える。

大学時代にはロングパンツを着用しなくなったが、デニムのショートパンツやジャケットとして青を取り入れることがあったことから、大学時代は再び割合として確認できるが中学生の頃のように割合としては高くない。

茶、ベージュは上の被服の色というよりはスカート、ショートパンツというようにスカート類やズボン類としてや、カバン、ブーツのような装飾品として取り入れられることが多いことが写真データから確認できた。茶は大学時代の21歳（大2）、22歳（大3）には2割弱を占めるようになる。

紫に関しては高校時代に初めて取り入れられる。これは高校時代の体操服のジャージの色が紫であり、体育祭の時に撮影した写真が何枚か確認できたためである。19歳、21歳（大2）、23歳（大3）の時にも紫が選択されているが、これはタイツやレギンスとして新たに取り入れることとなったためである。小学生から高校生まではほとんど選択されることがなかった

緑は、13歳（中1）の頃に7%の割合が選択していると確認できた以来であったが、大学生になるとコートやジャケット、ショートパンツに取り入れられるようになったので割合として再び確認できる。小学生の時、緑を選択されているのは当時の流行っていた歌手が表柄や迷彩柄の服装を取り入れていたことから、友人とその歌手の真似をすることがブームになっていたことが原因だ。今まで着たことがない色を着装しようとするのは、自分だけ特別に違う服装をしようとするこだわりということではなく、友人みんなで憧れの歌手を参考にすることによる自分を作り上げていたからだ確認できた。

橙は10歳（小4）の頃はTシャツやトレーナーとしてよく着ていたので20%が写真として確認できたが、それ以降はあまり選択されることはなくなった。黄は16歳（高1）、20歳（大1）に取り入れることはあったが、どの期間も中心な色として選択されることはないことを確認できる。

最後に白と同様にどの期間にも選択されているものとして確認できるのはピンクである。私自身の一番好きな色であることもあり、小学校の時のランドセル、高校生の時に買ったジャケット、スカート、ワンピース、カバン、靴などさまざまなものに対してピンクを好んで取り入れていた。高校生（特に高2）の頃は31%の割合を占める。

しかし、予備校時代は図5-3の色の推移から、制服のブレザーの色とは違い、〈私服〉と

してのグレーや黒、紫が増え、高校時代に比べてピンクが減少する。高校時代に私自身考えていたピンクに対するこだわりがなくなり始めた頃と確認できた。ちょうど受験のため、コンサートに行くことを止め、その同じ趣味を持つ友人とも会う機会がなくなったことが1つの原因として考えられる。

さらに詳しく色の移り変わりを見ていくと、興味深いのは、大学生になると、高校生までと同様にピンクを選択することもあるが、その他様々な色を取り入れるようになったということである。色は黒やグレー、青という暗色、寒色であっても白いフリルの付いている丸い襟のTシャツというようなデザインの被服が目立つ。1つの色に対するこだわりは表5-3、図5-3のような結果からなくなったと読みとれる。

まとめると、ピンクが好きで着装していることには変わらないが、大学生になると、その他にも様々な色の服装を着装するようになり、〈自己〉を表現する色が多岐に渡っていることが確認できた。インタビューや図5-1-2より、大学に入って人間関係も広がり、様々な人と出会う中で彼女たちの影響を受けたことが原因ではないだろうか。特に、23歳(大4)は、図5-1-2からも読み取れるように、学校行事、日常生活、遊び、友人との旅行、特別イベントなどこれまで以上に様々な場面で撮影することが多くなり、彼女自身に影響を受ける人が増えたということが確認できた。

5.4 服装の移り変わりの分析

さらに友人Aの服装について詳しく分析するために、写真データを基にスカート類とズボン類に分類し、写真データを基にスカート、制服(スカート)、ワンピース、ショートパンツ、ハーフパンツ、ロングパンツ、オーバーオール、体操服(ズボン)に分類し、各年齢において総数と割合を図表化した。

表 5-4-1 服装と年齢(10歳～23歳)

年齢 (学 年)	スカート類(%)			ズボン類(%)				
	スカート	制服(スカ ート)	ワンピース	ショ ートパ ンツ	ハ ーフパ ンツ	ロ ングパ ンツ	オ ーバ ーオ ール	体 操服 (ズ ボン)
10歳 (小4)	0(0)	0(0)	1(17)	0(0)	0(0)	2(33)	0(0)	3(50)
11歳 (小5)	0(0)	1(14)	1(14)	0(0)	0(0)	3(43)	0(0)	2(29)
12歳 (小6)	0(0)	2(25)	1(12)	0(0)	0(0)	3(38)	0(0)	2(25)
13歳 (中1)	2(18)	0(0)	0(0)	1(9)	0(0)	5(46)	0(0)	3(27)
14歳 (中2)	3(27)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	7(64)	0(0)	1(9)
15歳 (中3)	0	2(28)	0(0)	0(0)	0(0)	3(43)	0(0)	2(29)
16歳 (高1)	2(17)	5(42)	0(0)	0(0)	0(0)	4(33)	0(0)	1(8)
17歳 (高2)	3(25)	4(34)	2(17)	0(0)	0(0)	1(8)	1(8)	1(8)
18歳 (高3)	1(20)	3(60)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(20)
19歳	1(25)	0(0)	2(50)	0(0)	0(0)	1(25)	0(0)	0(0)
20歳 (大1)	5(50)	0(0)	5(50)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
21歳 (大2)	3(37)	0(0)	2(25)	3(38)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
22歳 (大3)	5(4)	0(0)	2(17)	5(42)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
23歳 (大4)	6(38)	0(0)	5(31)	5(31)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

※各年齢で最も着回数の高い被服に色をつけている。

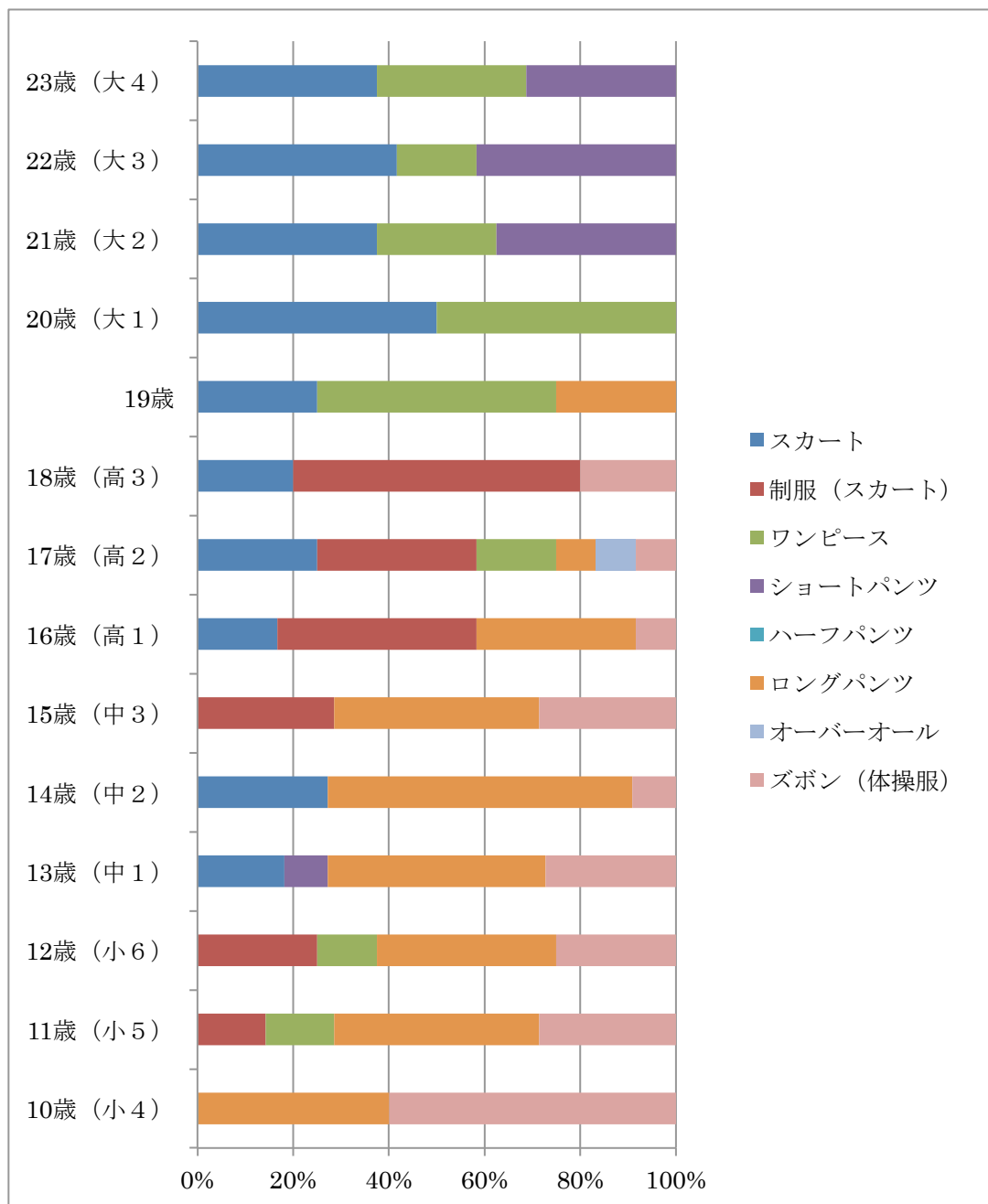


図 5-4 服装と年齢(10歳～23歳)

年齢別に服装の推移を見ていく。11歳(小5)、12歳(小6)、中学の3年間においてはロングパンツが嗜好されており、また次いでズボン(体操服)、制服、スカートが多い。この期間の服装に関しては、衣服の下半身にこだわることはなかったのか、ロングパンツが特に多い特に14歳の頃は64%を占める。

大きな服装の転換が起きているのは17歳(高2)からだと言える。制服のスカートを除いてはスカート類がズボン類を上回ることにはなかったが、17歳の時はズボン類が減少し、スカートやワンピースを意識的に着るようになった。スカート類を中心にズボン類、制服なども着装しており、服装に関して偏りが小さく、様々なタイプの服装をしていたことが

読み取れる。

また服装の推移から高校時代は制服を着装した写真が中学校時代より増え、割合が増えたことが読み取れる。特に18歳(高3)の頃は制服(スカート)が60%を占めるこの点でも中学校時代と高校時代は服装に関して大きな変化があることが分かる。

もう1つの大きな分岐点は高校を卒業して予備校時代を経て、大学に入った頃である。大学に入学してからズボン類の中でもロングパンツを着装している写真がなくなった。20歳(大1)はワンピース、スカートですべての割合を占めることが表5-2からも読み取れる。写真に収められていないショートパンツは着装することはあったが、ロングパンツは全く大学に着装して来たことはなかった。

大学2回生になっての特徴としてショートパンツを着装した写真が増え始めたといえる。ワンピース、スカートは依然として着装しているがショートパンツは大学3回生、4回生とも上位を占めるほど多く着装していたことが読み取れる。

以上から、友人Aの被服に関して大まかな転換期は、スカートやワンピースを意識的に着るようになった17歳(高1)、ロングパンツを着装しなくなった20歳(大1)の頃だと思われる。

ここで図5-3、図5-4で得られた服装の特徴や、インタビューで得られた情報を基に友人Aの年齢別の主に影響を受けた社会集団とその社会集団の特徴を表にまとめた。

表 5-4-2 社会集団と服装と年齢（10 歳～23 歳）

年齢	影響を受けた社会集団（人）	服装の主な特徴	社会集団の特徴
10 歳 (小 4)	学友、母親	G パン	
11 歳 (小 5)	学友	G パン	
12 歳 (小 6)	学友、学習塾の友人	G パン	
13 歳 (中 1)	学友、学習塾の友人	G パン	ブランド志向
14 歳 (中 2)	学友、学習塾の友人	G パン	ブランド志向
15 歳 (中 3)	学友、学習塾の友人	G パン	真面目
16 歳 (高 1)	学友、同じ趣味の人々	G パン、制服	
17 歳 (高 2)	同じ趣味の人たち (コンサートで出会う 人々など)	制服、スカート、 ワンピース	フェミニン(ピンク の服)
18 歳 (高 3)	学友	制服	
19 歳	学友	ワンピース	真面目
20 歳 (大 1)	同じ趣味の友人	スカート、ワンピース	カジュアル
21 歳 (大 2)	同じ趣味の友人	スカート、ショートパンツ	カジュアル
22 歳 (大 3)	学友	スカート、ショートパンツ	カジュアル
23 歳 (大 4)	学友	スカート、ショートパンツ、ワン ピース	カジュアル

このように、表 5-1 において周囲の人物と属性より、写真データにおいて誰と一緒に撮影されたかということと、実際のインタビューにおいて得られた、実際友人 A の影響を受けた人物は少々違いがあるという結果になった。例えば、友人 A はインタビューにおいて、中学校時代は〈学習塾の友人〉が 1 番影響を受けたと述べていたが、写真データとして残っているのは〈学友〉である。

つまり写真データにおいて、一緒に写っている人は必ずしも自分が 1 番影響を受けた社会集団に当てはまるのではないという結果が確認できた。

ここで先行研究において Goffman の〈パフォーマンス〉を被服を着ること、〈パフォーマー〉を友人 A と設定する。また友人 A の行為が行われる背景を〈setting〉、友人 A が自己を呈示していた〈オーディエンス〉、自分らしさを示す方法＝被服として〈方針〉、自己の望ましい被服のイメージとして〈面目〉とする。なお、〈setting〉は背景の他にも小道具になっている家具・装飾品・物理的配置など、その他背景になる品々を含める。

これをさらに、インタビュー、やこれまで示した表を基に上述した Goffman のそれぞれのカテゴリーを年齢別に当てはめてみると次のような結果が得られた。また、〈面目〉に関しては、G パン、スカートというようにズボン類やスカート類にこだわることなくトレーナー、Tシャツなど、という上着も含める。インタビューを基に、その時々友人 A が望ましいと思っていた被服の特徴を表にした。

表 5-4-3 ゴフマンのカテゴリーと年齢（10歳～23歳）

年齢	setting	オーディエンス	方針	面目
10歳 (小4)	TV、学校	学友	Gパン ヒョウ柄、迷彩柄	母親と自分の好みの服、歌手と同じ服（流行の格好）
11歳 (小5)	TV、学校	学友	Gパン ヒョウ柄、迷彩柄	母親と自分の好みの服、歌手と同じ服（流行の格好）
12歳 (小6)	TV、学校	学友	Gパン ヒョウ柄、迷彩柄	母親と自分の好みの服、歌手と同じ服（流行の格好）
13歳 (中1)	学習塾、雑誌	学友、学習塾の友人	キャラクタープリント、大きいロゴ	学習塾の友人と同じブランドの服
14歳 (中2)	学習塾、雑誌	学友、学習塾の友人	キャラクタープリント、大きいロゴ	学習塾の友人と同じブランドの服
15歳 (中3)	学習塾、雑誌	学友、学習塾の友人	キャラクタープリント、大きいロゴ	学習塾の友人と同じブランドの服
16歳 (高1)	雑誌、コンサート	学友、同じ趣味の人々（コンサートで出会う人々など）	フェミニン（ピンクの服）	目立てる、服可愛い女の子らしい服（お姫様意識）
17歳 (高2)	雑誌、コンサート	学友、同じ趣味の人々（コンサートで出会う人々など）	フェミニン（ピンクの服）	目立てる、服可愛い女の子らしい服（お姫様意識）
18歳 (高3)	学校	学友	制服	みんなと同じ制服
19歳	予備校	学友	ワンピース	派手ではなく、平凡に見える服
20歳 (大1)	大学、遊びに出かける場所	同じ趣味の友人	スカート、ワンピース	入学当初は自分にとって大人らしい服、その後カジュアル
21歳 (大2)	大学、遊びに出かける場所	同じ趣味の友人	スカート、ショートパンツ	女の子らしいカジュアル
22歳 (大3)	大学	学友	スカート、ショートパンツ	女の子らしいカジュアル
23歳 (大4)	大学、行事事	学友	スカート、ショートパンツ、ワンピース	女の子らしいカジュアル

私は、我々はその時々々の社会集団の影響を受け、その相互作用を通して、Goffman(1967=2002)のいう〈方針〉、つまり自分に対するイメージを作り上げる被服を選択し、自己の面目を保っているのではないだろうかという仮説を立てた。彼女（パフォーマー）がいかに関し自己呈示し、面目を保ち、自己が変化していったかを順に上図を基に考察していく。

(1)小学時代

まず彼女の小学生の頃は、運動会、遠足、修学旅行など学校行事などにおいて学友と写っている写真が多く、主に彼女たちの影響を受けていたと確認できた。学友とその当時流行した歌手の格好をマネしたり、母親と共に自分が着る被服を選択していた。学友と同じような服を着なければならぬ、ある程度母親の好みを守る(母親の望むイメージの維持)ということを見ると、他者から思われているイメージを守ることを目的に被服を選んでいたと確認できた。当時の友人 A は TV や学友、母親という周りの存在を〈舞台〉とし、自分の意思で他者の望むイメージを作り上げるのではなく、周りに流されて自然と他者にとって求められている自己を作り上げ、自己を演出していたのではないだろうか。

(2)中学時代

中学時代の大きな特徴として挙げられるのは、学習塾での友人に被服の影響を受けたことである。表 5-4-2 の社会集団と服装と年齢からも読み取れるように、キッズブランドを着装している学校外の友人と同じようなデザインの被服がほしいと思っていた頃である。さらにインタビューより、ティーン向けの雑誌を買い始めたのもその頃である。さらに言うと写真データでは学友と写っている方が多いが、自分の被服の選択にあたって、制服ではなく私服の影響を受けていたのは学習塾である。デザインがどうしても気に入ったというよりは、友人がブランドの服を着ているのでほしいというように、周りに流されて自分の被服に対するイメージを作り上げていたように考えられる。友人 A 学習塾においては同じようなブランドの洋服を着続けることで、他者によってブランドの服を着ているというようなイメージが作られ、そのイメージを守るように努めていたのではないだろうか。

(3)高校時代

16 歳(高 1)、17 歳(高 2)は雑誌や趣味のコンサートで出会う人々を参考に、自己を作っていた。学友やコンサートで出会う人々に彼女が思う〈女の子らしい〉被服を演出していた。

ここで、神山(1998)の述べた「自己」における「被服とセルフ・イメージ」に関する事例としてジェンダー（男らしさや女らしさといった社会的・文化的側面からみた性差）に関連した被服行動を紹介する。被服は、自己をどれくらい男らしくあるいは女らしく見ているかの自己認知（ジェンダー・アイデンティティないし性役割同一性）に影響する。例えば、カジュアルな服装を好む女性にくらべて、女らしい服装を好む女性は自分をおとなしく、女らしい人間であるにとらえる。ジェンダーは特に既製の企画では、商品差別化の重要な方法である。女性向けの衣服やバック類には暖かく、柔らかい色いっそう多く用いられている。花柄、愛玩動物柄といった図柄や、丸みのある形、やわらかな感触といった被服の形や感触にも巧みにジェンダーのイメージが演出され、それらがジェンダーの自

己認知に影響する(神山 1998)。

このように述べられているように、友人 A は〈女の子らしい〉と思えるような被服を通して、自分は女らしいという自己認知をしていたように思える。彼女の場合であれば、ピンク色の被服を着ることでジェンダーのイメージを作り上げ、自己を認知していたと考えられる。つまり、16 歳(高 1)、17 歳(高 2)は学友やコンサートで出会う人々に、自分が女の子らしいというイメージを保つために、主にピンク色の被服、スカート、ワンピースなどを着用し、自己呈示していたと確認できた。

次に 18 歳(高 3)は図 5-3 の色の推移の分析から〈グレー〉が多いが、このグレーは上述したように、〈制服〉のブレザーの色である。

西川(1999)は制服の実用的機能とは違い、心理、社会的機能について磯部(1993)の学校制服に関する研究について言及している。中学校、高等学校の制服を着用した経験をもつ大学生に、制服の着ごちに関する実用的機能とは別に、制服を着用することで個性がなくなる、自己主張ができない、何を着ていくか迷わなくてすむ、あるいは服への興味・おしゃれへの関心がなくなるといった反応を見出した研究を紹介している。また西川(1999)は、制服を着ることで集団生活の自覚や仲間意識が強化され、同じ制服を着ることは、機能同士が何らかの結びつきももつものだと述べられている。さらに古結亜希、松浦均(2012)は制服を着装することは、「対人的な不安に起因する一種の同調的な反応の現れ」と述べている。この不安というものは、学校制度や教師に起因するものではなく、主に友人関係による不安であると考えられているということだ。青年期の自己概念の発達にあたって、制服を着装するとは、仲間集団が多いに影響を与えていると述べられている。

これらは友人 A 自身、高校時代に制服を小学校や中学校時代以上に好んで着装することで、私服に対する興味が薄れ、新しい被服がほしいという思い、被服に対するこだわりというものがなくなったということに当てはまる。また制服をどこに行く時も友人と揃って着用し、連帯感を高めていたということにも当てはまる。つまりこの頃は彼女は学友に対して、同じ被服を着用することで、仲間意識を示すことで印象管理していたと考えられる。

(4)予備校時代

まず、特徴としてこの時期の写真データはあまり残っていない。毎日予備校に行き受験勉強に励んでいたため、インタビューにおける〈平凡〉な服装であった、被服をあまり買わなかったという発言から、高校時代に見られたような被服に対するこだわりというものは見られない。自分の被服を見せる主な対象としては、予備校で出会う友人であり、その友人たちから受験生らしく見られるように、つまり受験生らしいという他者からのイメージを守るように被服を選んでいたと確認できる。予備校、そこで出会う同じ受験生の友人という〈舞台〉において〈平凡な受験生〉という印象管理をしていたのがこの時期の特徴である。

(5)大学時代

大学 1、2 回生は主に学校外の友人の影響を受けている。G パンをはかなくなったことのはっきりとした原因というものは確認できなかったが、着装状況では、今まで以上に行動範囲が増え、さまざまな人の影響を受けるようになったのだろうか。これまで以上に被服

において様々な色の選択もするようになった。結果として言えるのは大学1、2回生の友人Aの被服の見せる対象として考えられるのは主に学校外の友人である。一緒によく被服を買うことが多かったというインタビュー内容からも、共に友人Aのイメージを作り上げ、彼女たちの自己に対するイメージを守る(面目を保つ)ように努めていたと考えられる。

大学3、4回生はインタビューや写真データから、大学という〈舞台〉において主に学友と過ごすことを楽しんでいることが確認できた。大学生活に慣れを感じると同時に、学友の望む友人Aの被服のイメージと友人Aの望むイメージが女の子らしいカジュアルで一致していたのではないだろうか。

さらに、細かく考察していくと、大学1回生の時にインタビューにおいて〈自分のイメージする大学生〉を学友たちに演出していた時期があったことが確認できた。彼女にとって自分らしさというものが見いだせず、うまく自己を呈示できなかった時期である。

石黒(1974)によると、ある行為主体が特定の役目を演じているとき、彼は自分を観察する人びとに、彼らを前にして作りだされた印象が真面目に受け容れられることを暗黙のうちに求めている。つまり、〈その人らしい〉というように観察している人々に思われたいと常に感じていることだと思われると述べている。しかし、こういう自分に見られたいが、他者は自分に対して自分の望まないイメージ、自分の表現しているイメージと違う印象を他者が抱く時には自分を見失うことがあるかもしれない。これが Goffman(1959)のいう〈面目を失う〉時だ。

大学生時代当初、友人Aは彼女の思う〈大学生らしい自己〉を演出しようとしていたが、それが、〈学友や学校外の友人の思う友人A〉ではなかったのではないかと。

自分に〈ぴったり合う〉、自分らしいと思える服装ができていて、その表現した自己の印象を他者が受け入れた時、私たちは自分の思う自己呈示、印象管理ができる。自分らしい、自分の周囲にいる人に自分が見せたい自分を呈示し、なおかつそれに納得できているということは、なりたい自分になれているということであると考えられる。つまり、自分が自分らしくなるためには、〈私とはこういう人間である〉ということが、他者から認められているということが必要なのではないだろうか。これは、友人Aが〈自分らしい〉服を着ていると実感している大学3、4回生の時に当てはまる。なりたい自分と他者が思う自分が一致し、自分らしさというものに気付いたと考えられる。

大学時代までの考察の結果、友人Aのインタビューや写真データから、彼女の各年齢における集団(オーディエンス)との関わり、その当時の背景(setting)によって、自分の服装を変えているということが確認できた。

友人Aは各年齢において、関わる社会集団の変化のなか、様々な出来事の流れのなかで出てくる〈面目〉をその時々意識的にも無意識的にも想定し、それを保ち、印象管理していたということが確認できた。

おわりに

私の論題として掲げた、我々はその時々社会集団の影響を受け、その相互作用を通して、Goffman(1967=2002)のいう〈方針〉、つまり自分に対するイメージを作り上げる被服を選択し、自己の面目を保っているのではないだろうかという仮説に対する考察は完全な

ものとは言い難い。なぜならば、本論で扱った研究対象は、あくまでも友人 A であって、単なる 1 人のモデルにすぎないからである。さらに多くの人の写真データ分析、インタビューを行うことができれば、より深い分析・考察を行うことができたのではないかと考えており、それが今後の課題といえる。

我々はたくさんの人々と出会い生活を送る中、出会うすべての人と相互関係があり、影響し合い、お互いの被服に何らかの影響を与えているとは言い難い。しかし、被服は社会に対してさまざまな情報を発信する。そして人は、それらの情報（意味）を自分の生き方のシンボルとして採用し、それによって自分をいっそう明確にしたり、自分をいっそう肯定的に変えたり、また他者とのかかわり方をいっそう好ましく展開させることもある。我々は決して自分の好みだけで被服を選んでいるのではなく、いつも周りに誰かがいて、彼らに向かって被服を通して「自己」の情報を伝達しているといえる。他者と繋がり、支えあう日常生活において被服を通して我々は自分の印象を管理し、新しい自分を作り上げている。

参考文献

- 安藤清志, 1994, 『見せる自分/見せない自分——自己呈示の社会心理学——』サイエンス社.
- 藤原康晴・伊藤紀之・中川早苗, 2005, 『服飾と心理』放送大学教育振興会.
- Goffman Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Anchor Book.
- Goffman Erving, 1967, *Interaction Ritual*, Anchor Book.(=2002, 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版局).
- 神山進, 1998, 「被服の社会・心理的機能」『繊維製品消費科学』39(11): 678-679.
- 石黒毅, 1974, 『行為と演技：日常生活における自己呈示 E.ゴッフマン[著]』誠信書房.
- 古結亜希・松浦均, 2012, 「高校生の自己意識が制服着装行動に与える影響について」『三重大学教育学部研究紀要』63: 295.
- 中島義明・神山進, 1996, 『まとう——被服行動の心理学——』朝倉書店.
- 二宮克美, 子安増生編, 2011, 『社会心理学』新曜社.
- 西川正之, 1999, 「制服についての社会心理学的考察」『繊維製品消費科学』40: 432.
- 鈴木理紗・神山進, 2003, 「被服による自己呈示に関する研究—被服によって呈示したい自己および自己呈示に係わる被服行動—」『繊維製品消費科学』44(11): 653.
- 高木修, 1998, 「被服行動研究における社会心理学的接近法」『繊維製品消費科学』39(11): 671.
- 高木修監修, 大坊郁夫・神山進, 1996, 『被服と化粧の社会心理学——人はなぜ装うのか——』北大路書房.